

延享元年、徳川宗直の御帰城と橋本町方

笠原正夫

はじめに

『南紀徳川史』には、歴代の紀州藩主の江戸御参府（参勤交代）と御帰城（国）の行程についての詳細な記録が記されている。紀州藩に関するまとまった藩政史料の少ない現状で、『南紀徳川史』は貴重な史料として藩政史研究に活用されて来た。周知のとおり『南紀徳川史』は堀内真によつて編纂された史料集で、藩政史以外に、経済史、文化史、宗教史や民俗学の研究においても利用が可能である。

そうしたなかで、藤本清二郎氏は、三浦家文書の「江戸出府日記」「御用番留帳」「年中日記」「家乗」の関連記事などを検討して参勤交代の時期、行程について、『南紀徳川史』の記述の参勤交代の行程に誤りがあることを明らかにした。^{〔1〕}

参勤交代の制度化により諸大名を統轄して徳川幕府権力は確立されて行くが、幕藩体制の根幹にあたる参勤交代の行程の記述において正確性に欠ける点があるとすれば、『南紀徳川史』の他の記述の部分においても正確であるかどうか疑問が湧いてくるのを否定できず、その利用においても慎重にならざるを得なくなる。そうした点からも藤本氏が提起された意味は大きく、今後の紀州藩の藩政史研究においても慎重に取り扱わなければならないと考える。

本稿は、第六代藩主徳川宗直の江戸からの帰国に備えて作成された「御参府・御帰城之節覚書帳」⁽²⁾を基に参勤交代について考察したが、江戸からの長い旅路を経て紀伊国に到着した宗直の一行をどのように迎えるのか、留守をあずかる紀州藩の上層部が立案した計画が伊都郡奉行・御代官から橋本町方にも届けられている。伊勢松坂に帰って来て、伊勢街道を通って橋本町へ入って来る藩主一行の対応について、この「覚書帳」は、詳細に記しているが、通行して来る道筋とそれを迎える人々の動きや宿所となる橋本町と東家村の受け入れ体制を理解することができる。

ここでは、主として藩主徳川宗直の参勤交代の帰国は、伊都・橋本地方の領民の生活にどのような負担を課しているのかについて考えてみたい。

一 参勤交代の通行路の変遷

紀伊徳川家の初代藩主徳川頼宣の御参府は、元和六年（一六二〇）閏十二月十七日が最初で、その後も何度か行われている⁽³⁾。一般には、寛永十二年（一六三五）の武家諸法度の改定により一年おきの江戸と領国間の往復が規定され、幕府の統制力が強化されたとするが必ずしもそのようにはなっていない。紀伊徳川家の場合一年おきの御参府の制度が定着するのは万治二年（一六五八）からといってよい⁽⁴⁾。頼宣は、寛文七年（一六六七）に家督を譲るが、その後の寛文九年が最後の御参府である⁽⁵⁾。頼宣の御参府は、和歌山を発ち、伊勢街道を岩出・橋本を経て大和領に入った。土田・越部を通り鷲家に着き、高峰の高見峠を越えて伊勢松坂領に入り、川俣街道を通って松坂に到るコースである。大和領以外はすべて紀伊徳川家の所領である。「国祖以来大慧公御代（徳川宗直時代）までは、江戸御参府には松坂領大口浦から三州吉田、尾州熱田へ御渡海、御帰国は右両所から大口浦へ御航海あらせらる。吉田御渡海は龍祖御代に止まり、以後は大口・熱田間御渡海なり、時としては陸路御旅行もありたる也」⁽⁶⁾とあり、

松坂領大口浦から伊勢湾を船で北上して尾張領・三河領へ渡海し、東海道を宿場沿いに江戸へ向っている。寛文十一年（一六七二）の第二代藩主徳川光貞も御参府には伊勢街道を通って松坂城へ入り、大口浦から海路を尾張へ渡り、東海道を通って行ったが、江戸まで御参府に要した日数は一三〇一六日と推定される。⁽⁷⁾しかし、海路は便利であるが天氣に左右される場合もあり、光貞に随伴した家老三浦為隆の「年中日記」の元禄五年三月五日・六日の記述に、「天氣悪しく御渡海難被遊二付陸地ヲ御越」とあり、伊勢湾を縦断できずに日数の要する陸路を白子・四日市を通り、桑名を経て熱田へ向かわなければならぬ場合もあったようである。⁽⁸⁾

光貞は、延宝五年（一六七七）三月、江戸からの帰国のとき、「上海道御越、四月七日北伊勢御通行被遊」とある。⁽⁹⁾通常の松坂から伊勢街道を通って和歌山へ入る行程をとらずに上方地方に目を向けて、京都・大坂の「上海道」を通行している。

一七世紀末〜一八世紀初の紀州藩は、三代綱教、四代頼職、五代頼方と、光貞の実子の三兄弟の藩主時代である。この時期の特徴は、御参府・御帰城とも京都、大坂を利用しており、従来の松坂経由の伊勢街道の通行に代わって上方街道の通行が体制化されたようである。⁽¹⁰⁾それが可能になったのは、飛脚便の発達や宿泊施設が整備されたので、夜間の通行や早朝の出発にも対応できる都市的な機能が各地で整って来たからであろう。とりわけ上方地方においてはその発達が目覚しく、上方街道の利用が便利になったと考えられる。

元禄期になって、上方地方は経済的向上を基盤にして飛躍的な社会発展があり、高度な文化も生まれている。そうした上方地方の動向を無視して、各藩ともに領国統治は不可能になっていた。紀州藩においても御参府・御帰城時に通行することによって京都、大坂の状況を吸集する絶好の機会となった。こうして上方街道は、紀州藩の御参府と御帰城の本街道になっていった。

徳川吉宗が第八代将軍となったあとの紀州藩へ、正徳六年（一七一六）五月、従兄弟の松平頼純が伊豫西條から

赴任した。『南紀徳川史』は、「五月朔日御本家御相統徳川左京大夫ト奉稱」とある。⁽¹⁾第六代藩主徳川宗直である。宗直の御初入りは享保三年四月であるが、その後四一年に及んだ宗直の藩主在任中に御参府は一七回行われており、江戸、和歌山の往復は三四回である。このうち半数の一七回は、初代徳川頼宣以来の松坂を経由する道筋をとっており、一二回は京都・大坂を経由する上方街道を通っている。五回は記述がなく不明である。⁽²⁾

元禄期の上方地方の発展に伴ない紀州藩の御参府・御帰城の通行路は、従来の松坂経由から京都・大坂を視野に入れる上方街道を通る行程が、吉宗の時代に制度化されたにもかかわらず、宗直の時代になつて松坂経由の伊勢街道の通行に戻っている。とくに宗直の藩主就任直後の享保期に激増している理由について考えてみよう。

伊豫西條から紀州藩主に迎えられた宗直は、紀伊徳川家の領国内の事情がいまひとつ明らかではなかった。短命であつたとはいえ綱教・頼職・頼方（吉宗）の三兄弟は、若いころから父親光貞に伴われて領国の巡見を何度も行っていた。宗直にとっては、自身が藩主として統治しなければならない領国の状況や領民の生活のようすを知ることが急がれた。

享保三年四月に紀伊国に入国した宗直は、七日と九日に岩出御殿、十日には椒御殿を訪ずれ、十一月には伊勢領松坂から田丸にかけての巡見をしている。⁽³⁾翌四年になり、江戸御参府に出発する直前の二月に御坊村の西円寺（のちの御坊別院）を訪れており、精力的に領内を廻っている。同六年十月、將軍吉宗は和歌浦東照宮の他、日前・国懸両宮、伊太祈曽、須佐明神、刺田比古や本宮・新宮・那智の熊野三山の九社に真太刀一振と御馬代として黄金一枚を贈つたが、宗直がそれに関与している。⁽⁴⁾同七年十月十五日から宗直は熊野地方の巡見に出発し、熊野地方に初めて足を入れ、熊野三山の社参をしている。⁽⁵⁾同九年には三山社中が幕府に願い出て、翌十年に諸国から多額の勸化金を集め、再建に取り組んだ。享保十五、十六年にかけて再建工事が実施されたが、宗直が再建の責任者となり、修築工事の現場では新宮城主水野大炊頭と家老三浦為隆がつとめている。⁽⁶⁾

熊野地方を訪れた宗直は、耕地の乏しい山村が多く、生産性の低い耕地と薪炭生産以外に頼れる生産の乏しい領民の生活を知り、その対策を構じている。享保七年と八年に出された儉約令は、家臣団を対象としたものとは異なり、「消極的の儉約令に依らずして積極的に富力の増進を図りしは、時流に超越せる卓見といふべきなり」と評された。⁽¹⁷⁾ 紀州藩の明律研究の中から育つて来た法令担当者により集大成された儉約令である。また紀州の農村に脈々と生き続けている「父母状」の精神を復活して農民教化に生かそうとした。⁽¹⁸⁾

享保十五年、和歌山城下湊紺屋町一丁目の御材木蔵の構内の湊御仕入方元役所の設立は、一七世紀末に熊野地方の山間部の領民の救済を目的に設立された「御救」の理念を引き継いでいるが、それまでの世襲制による手代に代わり、新たな人材を登用し、経験豊かな町人も町手代として運営にたずさわらせた斬新で合理的な仕法への転換である。⁽¹⁹⁾

紀伊国へ入国して以来、宗直の行動や諸政策を見ると、江戸参府や江戸からの帰国に宗直は、つとめて松坂経由の行程を選んでいく理由が理解できる。伊勢街道を松坂まで通行することにより紀の川筋の岩出・粉河・名手・橋本と続く在町や周辺の農村部や川俣街道を通って伊勢平野の村々の状況を直接掌握することが可能であり、華やかな大名行列を見せることによって紀州藩主の権威を領民に知らすこともできる。分家の西條藩から入って紀州藩主となった宗直が、統治者として領国内の実状について知ることが多かっただけに、江戸との往復の通行はそのチャンスであった。

宗直の後を継いだ七代藩主宗将以後の藩主の御参府、御帰城は上方街道を通行するようになっていく。⁽²⁰⁾ 伊勢街道は、伊勢領の統治のために松坂へ赴任する諸藩士や諸商人の往来者や伊勢参りの人々も多く通行している。

二 過酷な強行軍の大名行列

紀州藩は、紀伊領に三八万石余、伊勢領に一八万石余の所領を支配している。「伊勢三領」と称し、松坂領は一四八か村、七万四七三石余、田丸領は二三七か村、六万二〇一三石余、白子領は七二か村、四万七八〇二石余からなっている。⁽²¹⁾松坂城を守護し、伊勢領の全域を統轄するのが松坂御城代である。松坂御城代は七〇〇石、大番頭格の上級藩士で、松坂城内の役所に在勤した。⁽²²⁾松坂御城代の配下には、勢州奉行、松坂町奉行、松坂御船奉行、御代官（松坂・田丸・白子）などさまざまな職掌が置かれ、和歌山から派遣された多数の紀州藩士が勤務していた。彼らは伊勢街道を通って赴任した。元禄十五年（一七〇二）十一月の橋本町船仲間が大庄屋に願ひ出た書状に、「勢州御役人様方例年極月押詰り御戻被成候節ハ旅舟ハ無之、面々勝手仕廻等も得不仕候ても御用二候へハ罷下り申候」⁽²³⁾とあり、勢州勤務の役人が年末に和歌山へ帰って来るが、橋本では和歌山へ下る川舟もなくなっているの⁽²⁴⁾で、藩の御用を課せられている橋本船仲間だけが勢州勤務の藩士を和歌山へ乗せて行く状況を述べている。

伊勢街道は、大和領の村々を通っているが、距離的には紀州藩の所領の紀伊領と伊勢領の部分が多く、藩都和歌山と伊勢松坂を結ぶ最短距離である。そうしたところから、紀州藩では藩祖徳川頼宣や第二代藩主徳川光貞の藩政初期の頃から藩主の江戸御参府や御帰城のときに利用して来た。「和州越部・土田・鷺家村大概之趣」⁽²⁵⁾によると、「南龍院様御入国之砌、御願被為遊御領分へ入申候、江戸御往来之節之御用相勤申候」とあり、徳川頼宣が紀伊国に入国したときに、和州の越部・土田・鷺家の三村は徳川頼宣が参勤交代の費用に充てるため、幕府から紀州領として認められていた。年貢は田畑とも米納にし、元和六年より銀納となっていた。この三村は伊都郡奉行・御代官所の管轄下にあり、宗門改めをはじめ諸法令なども伊都郡域と同じ内容が公布されていた。

和歌山から松坂間は紀伊領の橋本、大和領の鷺家、松坂領内の川俣街道に沿う七日市か滝野あたりでそれぞれ宿泊して、四日間を要するのが一般的な慣行であった。それぞれの区間の距離はおおよそ五〇キロメートル位であ

り、それぞれの中間にあたる粉河、越部、粥見などに休所を設けて昼食をとったりした。鷺家と七日市・滝野の間には、標高一二四九メートルの高見山があり、大和と伊勢の国境であつた。かなり高所にある高見峠を越えなければならず、伊勢街道の最大の難所として通行者を苦しめた。

延享元年卯月の「御参府・御帰城之節覚書帳」に伊勢街道沿いの橋本町から鷺家村までの三八か村の村々が記されており、伊勢街道の道筋を明確にすることができ（表1参照）。伊都郡奉行・御代官所が管轄する村々である。御領分（紀伊領）は九か村、大和領は宇智郡一八か村、吉野郡一八か村で、合わせて一九か村である。

橋本を出て伊勢街道は、五條を通り平坦な宇智郡の阿田村、佐名手村あたりで吉野川北岸沿いに出て吉野郡の下淵村に入り、紀州藩の所領の土田村・越部村に到着する。吉野川北岸に沿って街道は吉野木材の集散地の上市村を過ぎてから、吉野川を離れて大海寺村（現河原屋村）で支流に沿って内陸部へ入る。山深い吉野の森林地帯の中の大小さまざまな峠を越えながら小集落をつなぐ坂道を通って山中に開けた三茶屋村に到り、さらに東へけわしい山道を通って鷺家村へ到着する。鷺家村は紀州藩の支配地で本陣、伝馬所の他に旅籠が多く、吉野森林地帯の東部に拓けた伊勢街道の拠点で、伊勢巡見の紀州藩主の一行や伊勢領に赴任する多くの紀州藩士も宿所に利用していた。

表1 橋本町と鷺家村間の村々

郡	村名	郡	村名
御領分	橋本町	吉野郡	下淵村
同	妻村	同	檜垣本村
同	河瀬村	同	土田村
同	下兵庫村	同	越部村
同	上兵庫村	同	新野村
同	中嶋村	同	北六田村
同	垂井村	同	増口村
同	芋生村	同	上市村
同	上夙村	同	大海寺村
宇智郡	畑田村	同	立野村
同	相谷村	同	佐々羅村
同	上野村	同	平尾村
同	大飼村	同	山口村
同	二見村	同	香束村
同	五條村	同	柳村
同	今井村	同	三ッ茶屋村
同	宇野村	同	小名村
同	三在村	同	鷺家村
同	阿田村	〔「御参府・御帰城之節覚書帳」より作成〕	
同	佐名手村		

参勤交代は、御参府においても御帰城においても移動日は早朝の暗いうちに出発し、夜のおそい時刻の到着が普通であった。

しかし、近世中期ごろの「申年正月」に勢州行き総糸売子の三人が、総屋年行司衆に願ひ出た「乍恐口上」⁽²⁵⁾によると、「橋本今越部迄者里数も有之候付、短日之節ハ直通シテ難相成候趣被申候付、五條宿二而中継致させ御座候、右五條継之義者橋本受御座候」とあり、伊勢街道を通つて総糸商いをしている商人たちが、橋本町から越部村までの一日の行程では、日の短い冬期では無理であるとして、五條村での中継ぎを決めている。伊勢街道は五條までは平坦な道が続き、五條を過ぎてからも吉野川沿いの村々も比較的平坦である。総糸商人が一日の行程では無理だという距離の二倍以上で、しかも峠越えの山道を通つて来る紀州藩の一行は想像以上の過酷な強行軍であつた。

三 「御参府・御帰城之節覚書帳」にみる橋本町の状況

延享元年（一七四四）卯月、江戸参府中の徳川宗直から帰国の通達が発せられたので、国元ではその受け入れのための準備が必要となつた。宗直一行が通行して来る伊勢街道が、郡内を横断している伊都・那賀両郡では、郡奉行御代官所が支配下の全大庄屋に通達を出してその準備に取りかかった。延享元年卯月の「御参府・御帰城之節覚書帳」の筆者は、その表紙に「橋谷組大庄屋」と書いているが、橋谷組は存在せず、伊都郡上組橋谷村に居住する贅川氏⁽²⁶⁾が書き留めたのであろう。この「覚書帳」によつて、宗直の帰国に備えて橋本町を中心とする伊都郡の人々が、どのような負担を課せられたのかを理解することができる。「覚書帳」の最後尾に、「御往来之時覚書」⁽²⁷⁾が記されている。藩主や藩政を担当する諸藩士が、平時に領内を巡視するときや伊勢三領の巡見、また紀州藩主の家族や縁者が通行するときなどには、その直前に大庄屋の指示により村々では村役人が街道の状況を調査して報告した。郡奉行御代官所は、その調査をもとにして郡内の状況を把握して通行の便宜をはかつたが、その内容が「御往来之

時覚書」として書き留めたのである。「御往来之時覚書」が記されているのは、関係する村々によつて何度も修理改修を繰り返しながら安全な通行ができるようになっており、街道の問題箇所をより明確にするために付記したのであろう。

「御参府・御帰城之節覚書帳」の内容を大別すると、(1)陸路である伊勢街道の安全な通行のための街道の整備と紀州藩の支配地である大和三領（土田・越部・鷲家の三か村）の統轄と詰所の設置に関すること、(2)宗直の宿泊所になる橋本御殿の整備と家臣団が宿泊する橋本町と東家村の宿所の確保と宿割り、町中の治安の維持に関すること、(3)二〇〇艘余の川舟の確保と早朝の出船に備えての橋本町の川船仲間の諸準備や狭い川岸での乗船や出船の世話、紀の川を下るにあたって川舟の安全な通行のための諸警備など、三点について記されている。

以下、この三項目を検討して、藩主の参勤交代に領民がどういう形で参加しているのか、また、それが領民に対して過酷な負担を課すことになっているのかなどについて考察してみよう。

(1) 伊勢街道の整備

御参府・御帰城についての御触が発表されると、御道筋破損の修繕所や道橋の大破の箇所があれば書状で申し出るように通達を出し、各大庄屋が見分、吟味をして郡御奉行衆へ報告させている。道筋で山根・岩石などがむき出しになっている所々や川沿いの橋梁の危ない所はないかを村々に尋ねて聞き出すように仰つけている。とくに通行当日在々の寺社や地士の御目見に出る人の名前と、その居住の場所を聞き出すこと、道筋へ胡乱者などが徘徊しないように注意をしている。

伊勢街道は、紀伊領から大和領へと続いて行くが、橋本町は国境に近く重要な要衝であり、御参府・御帰城とも藩主は必ず橋本御殿に立寄った。そのため橋本町方では人馬の準備が必要で、一行のお供衆を含む正確な人数を

早く把握しなければならなかった。「御当日^ふ十五・六日前御供人数合候上、人馬伊都、上郡賀・土田・越部へ相尋、員数ヲ決メ不足之時ハ寺領・河州^ふ和州馬雇ニ遣レ可申候」と、十五・六日前に村々から人馬を集めた。和州領の人馬は前田次郎兵衛方、寺領の人馬は清水村の萱野孫四郎方へ依頼し、河州領の馬は紀伊見峠肝煎方へ申し付けた。また橋本町方では、集められた賃人足は伝馬所庄屋の居住する近辺に集めた。賃人足は伊都郡の「三組御証文立」(上組、中組、丁ノ町組)として伝馬所払いで処理した。

和州の三領(土田・越部・鷺家)は伊都郡奉行・御代官所が統轄していた関係から、御帰城には橋本町方仲間のうちより越部へ詰める当番を派遣し、和州の人馬を雇う世話をした。越部へは人馬を雇う世話をする当番が到着する八日前に行つて任務についた。伊都郡の大庄屋たちも三日前に越部に着かなければならなかった。四月六日付で、伊都郡の大庄屋脇太兵衛・西山勘兵衛が連名で他の五郡(名草・海士・那賀・有田・日高)の大庄屋中にあてた書状が出されている。「此度御上国之節当月(四月)十三日和州鷺家御止宿、十四日土田御休に付、右之所々二而相立候人馬入用銀去ル辰年(元文元)御上国之時和州二而入用割符銀之積リヲ以郡々^ふ銀子持参候様二御申付可被成候、最御用詰役人來ル九日土田へ参着候様可被成候」とあり、伊勢松坂を出発して來た宗直一行は、和州鷺家に到着して止宿し、十四日に出發して土田で昼食休憩をとり、夕方には橋本に到着する予定であることを伝えている。

大和領内の接待は口六郡大庄屋の連帶責任であり、口六郡から派遣されて來た大庄屋・杖突たちは、到着の二日前に越部に参集した。このとき、元文元年(一七三六)の御帰城時の前例に倣い、和州での入用割賦銀を各大庄屋は、一組あたり銀二〇〇目ずつ持参して來た。この銀子は、和州領で徴発する人馬の費用に充てられた。和州領御用詰役人を勤める口六郡の大庄屋・杖突は、四月九日までに土田へ集結するように命じられており、それぞれ集まつて來た。伊勢街道の伊勢領の宿場波瀨(川俣街道の最奥地)から和州の土田までの間の人馬の用立ては、口六

郡派遣の大庄屋衆が担当していたので、驚家の人馬の世話もしていた。この地域は、前述したように、大和と伊勢の国境の高見峠の高地を越える伊勢街道の最大の難所である。この道路の破損個所の修復・掃除は、十四・五日前に通達して村々から才領人を八日前に巡回させている。その一兩日前には大庄屋が見分を命じられており念を入れている。急坂が多く悪路が連続する山岳地帯であるだけに、その管理は困難をきわめた。通行当日は、それぞれが各詰所に詰めて無事通行するのを見送った。

御参府・御帰城が発表されると、担当の口六郡の大庄屋は他行きを禁止され、和州の任地へ行き、各詰所へ配置されて人馬の確保や通行する街道の点検など、さまざまな準備に取りかかった。大庄屋にとつてこの御用役は過酷な任務であつた。

(2) 橋本御殿の整備

御帰国・御参府とも藩主は橋本御殿へ宿泊したが、御参府は和歌山から伊勢街道を陸路の通行であつた。御帰国は橋本から川舟で紀の川を下るのが普通であつた。

紀州藩では、歴代の藩主や上級家臣による領内の巡視や伊勢領の巡見時には橋本御殿が再三利用されている。橋本御殿の掃除や建具・家具の修理や整頓、諸々の賄いは、伊都郡奉行・御代官を通じて指示されたが、橋本町方が中心に携わっており、伊都の三組からも応援した。「御殿御台所聞次肝煎、庄屋之事」によると、肝煎、庄屋四人のうち、二人は橋本町方から出すように申付けられ、あとの二人は下両組（丁ノ町組、名手組）から出している。他に小遣人足九人も申付けられている。また、御殿賄所詰役人は東家組（上組）より一人、下両組から一人と小遣人足を七人、御台所腕方人足四人、御厨方人足三人、御番所詰人足三人が集められている。他に橋本と東家から「功者成者」を呼び出して御殿内の整理をさせ、壺や掛け軸などの飾りつけは町方の家々から借用して整えた。「御

殿御掃除障子張り替え二十日程前より被仰付候」とあり、早くから取りかかっている。御殿の掃除の御入用竹ほうきは御殿番に聞きあわせ、赤塚村へ御花生けの竹をかねて九寸廻りの青竹一本を調えさせた。「花生二而候故、随分無疵二而青色成ル美麗ナ竹」とある。その竹は直後には御船場の垣などに使用した。御殿の御台所で使用する野菜などの食材は、伊都三組のうちから庄屋三・四人が品々を整え、御台所の側に建てた御殿御賄部屋で調理ができるように整えた。

宗直が御殿に到着するまでに在々へ盗人と火の用心についての触を出し、一兩日前から出発後まで野山焼きと鉄砲の使用を禁止した。御参府・御帰城時とも橋本御殿の内外に番屋を四軒建てるのが通例であった。一軒は嘉左衛門宅の南の角、一軒は河川半四郎宅の前、一軒は西の御門の南、あとの一軒は小姓部屋（小姓部屋）の南入口であった。

「殿様御機嫌能只今橋本御殿江御着座被為遊候」とあり、四月十日の夜、宗直は無事橋本御殿に到着した。御殿に着座すると下四組（丁ノ町・名手・粉河・山崎の各組）と岩出組大庄屋の方へ伊都郡奉行が伝馬次の早便で到着した旨の書状を出した。

大庄屋脇太兵衛は、四月十日に組中の村々へ対して十一日までの間は、橋本へ牛馬を出さないようにと申付けている。行列一行は多くの馬を使用しているので、御厩を準備しなければならなかった。また、すそ鹽、飼桶などその他の入用物も整えた。三組の庄屋のうちから立会人を出し、馬方小遣い人足一人を申付けた。四月十日～十一日にかけて、伝馬所詰めには周辺の伝馬所五か村の庄屋が詰めていた。また、十日の夜は、御殿の近くで声高にならないように番屋の者や御殿近くの夜番の者には心得させた。橋本御殿の維持と管理は橋本町方が行なっていたが、藩主が宿泊したときはその任務は過大になり負担を強いた。

(3) 宿所・川舟の準備

橋本町方が課せられた最大の任務は、「御当日十日程前、郡奉行衆御代官御越、舟組・宿割御仕組可被成候」とあるように、川舟の準備と家臣団一行の宿所の準備であった。到着の十日程前から伊都郡奉行衆・御代官も加わってその複雑な作業に取りかかった。前例の宿割り进行を参考にして御供帳、宿割帳から宿割りの手を付けている。橋本町と東家村のうちに宿所に適する家を選び出し、玄関側の見繕いと雨漏りがないように修復をすることをそれぞれの家へ申渡した。「御宿割下帳」を作成するにあたって橋本町と東家村の役人が、御殿詰奥役と表役から意見を聞いて作成した。できあがった「御宿割下帳」は、大庄屋に見せて差図をうけた。宿割りが決まり次第その家々へ町方が下札を打ちに廻わり見分をうけた。それぞれの宿所へ家臣団の銘々が宿泊して、翌朝の出発を待った。

もう一方の「船組帳」の作成は、さらに複雑であった。「橋本^ふ御供舟之義、伊都、上那賀江船数聞合書付指上、他郡船之義弥極之通御用ニ相立候哉、郡奉行衆^ふ聞合有之様ニ可仕事」とあり、橋本町所属の川舟だけでは足りないので、伊都郡奉行御代官所が、口六郡の各役所にあてて使用可能な舟数の調査を求めている。その結果、六郡の船数、二一六艘と寺領の一艘の川舟を掌握している。その内わけは表2の通りである。伊都・上那賀域で七〇艘（三二・四％）と最も多く、那賀郡域が五四艘（二五・〇％）、名草郡域が二二艘（一〇・二％）で、紀の川を生活の基盤に置く川上船が全体の六八・六％を占めているが、その他に海士郡域が三六艘（一六・七％）と和歌山町舟三三艘（一五・三％）も加わって

表2 橋本川岸に集まった川船

六郡の船数	216
伊都・上那賀	70
東家組	30
大野組	1
丁ノ町組	17
名手組	2
粉河組	13
那賀郡	54
山崎組	8
三毛組	12
田中組	22
岩出組	12
名草郡	22
岩橋組	5
府中組	17
海士郡	36
吉原組	36
若山町舟	33

（延享元年卯月「御参府御帰城之節
覚書帳」より作成）

る。海士郡吉原組の川舟は、和歌山町舟とともに和歌山城下町を基盤にする川舟である。丁ノ町組、粉河組、田中組、府中組など川上舟の拠点からも川舟が集められており、紀の川流域の川舟を総動員していた。これらの川舟は次々と橋本の川岸に集まって来たが、才領が一人ずつ乗り組んで来ていた。才領は各郡奉行・御代官衆へ名前を届けており、それぞれの川舟は橋本へ登って来るときに、入用の六寸廻りの竹二本と七寸廻りの竹一本と染芹二〇〇目を積んで来ていた。

川舟は、橋本御殿近くの川岸に着岸するようにした。川岸に集まった川舟を橋本町川舟仲間が見分して、御供船には「宜船」を見立てて出船順を決めていったが、御供船と賃船を区分して郡奉行御代官の仮判によって区別し、「船組帳」へ記帳した。行列に使用する諸荷物と家臣団一行が所持する銘々の諸荷物が大量にあり、その積み込みを迅速に処理しなければならないので、川岸の才領の手腕が問われた。渡し場では、才領が大庄屋の指示で川岸の船付場の近辺を見分した。

郡奉行・御代官所の御船手担当の役人から瀬堀りの必要があるとの指示が出ると、瀬堀り人足を郡中へ割符した。瀬堀りは御船手方による見分もあり、瀬堀りのある年を聞き出して積書きを取って必要な人足を徴発した。瀬堀りをするときは、橋本町方から「功者成ル船人」を一人加えた。賃米は瀬堀り人足のうちから供出した。

藩主が乗船する御船は、四・五日前に川登しをする前例により登して来た。市脇・東家・寺脇・橋本の役人衆が川端に出て見守った。御船手役人や水主の者の宿はできるだけ橋本御殿の近辺に置くように申付けた。御帰城の最後の行程である紀の川の川下りに支障がないように細心の注意が払われた。

御殿には時計仕掛けを置いていた。聞きつけた者は間違ひなく念入りに聞いて小遣い人足に申付けて触れさせた。時触れの人足は橋本・東家の両所に置かれており、町中を声高によくわかるように触れ廻わった。

四月十二日、早朝七ツ時（午前四時）に橋本を出発することが発表されていたが、時刻が近づいて来ると川岸の

動きが激しくなつて来た。狭い川岸への着船数は限られており、少人数ずつしか乗り込むことができないので船頭は着岸と出船の技量を問われた。

「船組帳」は橋本町川船仲間によって作成された。御船手役人や船頭・水主の宿舎は橋本御殿の周辺に設けていた。「御当日船組所設役人員数之事」によると、伊都郡のうちから大庄屋二人と庄屋・肝煎五人を選び、他に船組手伝いに関係する者二人を加えて船組所へ集めて指揮をとった。橋本町と東家村から案内人を五人出させて町角に立つて直接案内させた。早朝の出船であることを考慮して家臣団の宿所の人数を割り当てていたが、宿所から多くの宿泊者が一度に出て来て混乱が発生する可能性もあり、伊都郡奉行・御代官所から役人衆が出て来てもめごとの仲裁にあたった。家臣団の宿所については、享保三年（一七一八）四月十六日の御帰国のときの前例にならない銀一〇匁を給した。

和歌山まで紀の川を下る川舟の順番は、一、御召船、二、御手船、三、御供船のうち御荷物・御道具の積船、四、御供船のうち行列の御道具の品々を積む川舟を五艘充てていた。五、御供船の一番として年寄衆の船、六、御供船の二番目は御用役衆の船、七、御年寄衆に渡される賃船で多くの家臣団の所持する諸荷物が積み込まれていた。二〇〇余艘の川舟は、それぞれ船印を掲げていた。

御帰城の当日は遠見人足が大和領では宇野、五條、須恵、真土峠の四か所へ置かれ、上夙村から人足を申付け、三、四日前に上組大庄屋が道筋を見分し、村々の人足を上夙村に集めて、人足の心得として、「殿様御駕遣二拝ミ候而かけぬけ橋本へ参り、御殿御玄関二而声高二私義遠見人足二而御座候、宇野二而拝ミ夫々かけ抜ケ参候」と唱え、その後のやるべき行動を申付けられている。橋本の横渡し船の船頭共も大庄屋元へ呼寄せられ、不審者を見つけたならばすぐ報告するように命じている。在々へは盗人の用心、火の用心、到着の一両日前から出発した後まで在々野山焼きを禁止し、野山で鉄砲を打たないこと、乱心駄の者が御道筋へ出て来ないことの触を出して、藩

主滞在中における細心の注意が払われた。

出船当日に大川筋では篝火を焼いたが、川の様子は常に変化するので、篝火の場所は川の状況を熟知している船頭や在々の者の意見も聞いている。元文元年の篝火焼きの場所は、寺領の清水村領三軒茶屋の塙尻り、岸がはな東の角、小田井の井関の瀬、学文路の渡し場の上ミ手、小田井の下モの大岩、入郷車屋の浦、慈尊院の酒屋新五郎浦、金屋前の油屋の下、兄村前工、大谷前塙尻り、折居前鞍出しの角、背之山中山のかたの一二か所をあげている。これらの地所を参考にし、橋本町方川舟仲間の船頭たちや在々へも問い合わせて篝火焼きの場所を決めて、伊都郡奉行・御代官所へ申達し、指図をうけて焼かせるようにした。篝火を目印にして危険な場所を回避しながら川舟の一行は紀の川を下って行った。その先頭には「奥の番衆」による一艘の川舟が「御先御用」として先導した。大須賀善兵衛ら「奥の番衆」ら三人が一艘の船に乗って御召船を先導した。

二〇〇艘余の大船団を率いた一行が紀の川を下って行った。その威風堂々とした光景は、川岸で見送る領民の目にどのように写ったであろうか。五十五万石の大大名の権威を領民に示すに十分であった。その日の夕刻に田井の瀬の渡し場で川舟を降りて和歌山城下へ入り帰城して、江戸からの長い旅を終えた。

まとめ

第六代紀州藩主徳川宗直は、在任中に江戸御参府は一七回に及んでおり、和歌山と江戸間を三四回往来しているが、元禄期に京都・大坂を通る上方街道が本街道となったにもかかわらず、半数の一七回も初代徳川頼宣以来の松坂を経由する伊勢街道を通っている。そこには、支藩の西條藩から紀州藩主となった宗直の所領の状況と領民の生活を早く知ろうとした思いがあった。

松坂など伊勢領へは多くの紀州藩士が伊勢街道を通って赴任した。総商人などの諸商人も紀州と伊勢の間を往来

している。しかし、伊勢街道は奥吉野の山岳地帯を通り抜けるのが大変で、初代藩主徳川頼宣は幕府から大和に三領（土田・越部・鷲家）を参勤交代の費用に供する目的で紀州藩の支配地として認められていた。したがって、大和三領は紀州藩伊都郡奉行・御代官の管轄地で、参勤交代には口六郡の大庄屋が三領の詰所に集まった。

紀州藩では、和歌山と松坂間は三泊四日の行程が通例であるが、奥吉野の山岳地帯から和勢の国境の高見峠を越える街道だけにかんがりの強行軍である。そのため、伊勢街道の維持に巡視や修復は怠ることはできなかった。

本稿で問題とした、延享元年卯月の「御参府・御帰城之節覚書帳」は、参勤交代の一行をうけ入れる橋本町方の状況を記している。通行する伊勢街道の整備、藩主の宿泊所となる橋本御殿の受け入れの準備や多数の家臣団の宿所にあてる民家の確保、橋本から和歌山へ下る川舟二百余艘の確保と早朝の出船時の迅速な河岸への着岸と乗船など詳細な計画を練っている。また暗い早朝の出船のため、事故を回避する必要から川の状況を熟知している人を配置し、随所で篝火を燃やしたことが理解される。こうした一連の準備に橋本町や東家村と周辺の伊都郡の村々が課せられた負担は実に大きかった。

紀の川の流れに沿って二〇〇余艘の川舟の大船団が下って行く参勤交代の一行を途中の村々の人々は紀の川の川辺で見送ったが、封建領主としての威厳と権威を示した。

（付記）本稿をまとめるにあたり、奈良県吉野郡吉野町吉野町教育委員会の御教示をうけた。御礼申しあげます。

注

（１）藤本清二郎「紀伊徳川家の参勤路・江戸通行路―川俣街道から上方街道―」（『紀州経済史文化史研究所紀要』第三六号、二〇一五年二月刊）、『紀州藩主徳川吉宗―明君伝説・宝永地震・隠密御用―』（吉川弘文館、

二〇一六年十二月一日刊)、「紀州時代吉宗史の再構成―『南紀徳川史』歴史像の克服―」(『紀州経済史、文化研究所紀要』第三七号、二〇一六年二月刊)で詳細に述べている。

(2) 『橋本市史』近世史料Ⅰ(橋本市、二〇〇七年三月刊)一八―三四頁。

(3) 『南紀徳川史』第一冊(名著出版、一九七〇年九月刊)七三頁に、「十五代史二曰、閏十二月十七日、尾紀兩卿参府」とある。

(4) 前掲「紀伊徳川家の参勤路・江戸通行路」。

(5) 前掲注(4)の論文の「第一表頼宣の参勤・帰国一覽」参照。

(6) 『松坂市史』第十一卷(史料篇近世(1)政治、松坂市、一九八二年刊)九四頁、「勢州役」。

(7) 前掲注(4)一二頁。

(8) 前掲注(4)一九頁。

(9) 前掲注(3)四五〇頁。

(10) 前掲注(4)「十七世紀末―十八世紀初めの参勤路。江戸通行路―綱教・頼職・吉宗期―」参照。

(11) 『南紀徳川史』第二冊(名著出版、一九七〇年刊)三頁。

(12) 前掲注(4)「第一七表 宗直以降藩主の参勤・帰国」参照。

(13) 前掲注(11)一七頁。

(14) 前掲注(11)二〇頁。

(15) 前掲注(11)二二頁。

(16) 『本宮町史』近世史料編(本宮町一九九七年三月刊)三五五―三六一頁、「寛政五年三月、本宮再建之勸化願

二付公儀寺社奉行板倉周防守殿御尋有之候二付一條留 本宮社中惣代 音無朝負」。

- (17) 『紀伊南牟婁郡誌』 上巻（名著出版、一九七一年刊）三六〇頁。
- (18) 拙著『紀州藩の政治と社会』（清文堂出版、二〇〇二年刊）八八頁。
- (19) 前掲注（18） 八八頁。
- (20) 前掲注（4） 二二頁、「第一七表参照」。
- (21) 『南紀徳川史』 第十冊（名著出版、一九七二年刊）三〇一～三〇三頁「紀勢石高地味物産」より引用した。
- (22) 前掲注（6） 九三～九五頁、「天保十五年諸手代諸同心等人数調」。
- (23) 前掲注（2） 五七七～五七八頁、「船仲間銀札拝借願」
- (24) 前掲注（21） 三一六～三七七頁。
- (25) 前掲注（2） 六三六～六三九頁、「総荷物橋本御伝馬所継立て願」。
- (26) 前掲注（2） 一八～三四頁。
- (27) 前掲注（2） 三二～三四頁。

以下引用している史料は、「御参府、御帰城之節覚書帳」に掲載する史料である。